

象牙の塔に棲む

異 孝之

つい最近、『コロキア』創刊よりさらに20年ほど遡る1950年代後半に三田の大学院生だったご婦人と語り合う機会があった。当時、ヴァージニア・ウルフやE・M・フォースターを研究していた赤木康子さんである。八ヶ岳の別荘地では数十年に及ぶお付き合いながら、大学院時代について伺ったのは初めてのことだ。彼女は西脇順三郎先生や厨川文夫先生、岩崎良三先生が教鞭を執っていた1957年、津田塾の学部から慶應義塾の大学院へ進んだ。当時、西脇先生はいつも上機嫌で、話題は次から次へと飛び移り、授業の途中で場所を喫茶店に移すことも多かったという。他方、厨川先生はいつも厳しく学生たちには徹底した予習を要求し、その質問に学生たちがたじろいでいると、助手の安東伸介先生がスラスラ答えたという。そして赤木さんは、すでに新進文芸評論家として華々しいデビューを飾っていた同級生の江藤淳氏に請われて『ペーオウルフ』予習のノートを貸したところ、彼はきちんと予習してきた赤木さんよりも上手く答えていたという。

わたしには到底知り得ない時代の回想に接することになったのは、元文藝春秋の編集者の平山周吉氏が江藤淳をめぐる取材のため研究室を訪問されたからである。早速、旧知の赤木さんを紹介したのは言うまでもない。その成果は氏の八百ページになんなんとする浩瀚な一冊『江藤淳は甦える』（新潮社、2019年）にまとめられ、今年度の第18回小林秀雄賞を受賞。同書は、各方面への徹底取材により、大学院を中退した江藤氏と英米文学専攻教授陣との複雑な関わりをつまびらかにしている。いわゆるアカデミズムとジャーナリズム、文学研究と文芸評論の亀裂と単独講和を知る上で避けては通れない書物だが、いまその点は追及しない。むしろ当時の大学院には、のちに東京大学教授となるロマン派研究の泰斗・由良君美氏も在籍しており、その半生を四方田犬彦氏が伝記『先生とわたし』（新潮社、2007年）にまとめていることをも、強調しておきたい。以上二冊と安東先生自身の『ミメシスの詩学』（慶應義塾大学出版会、2013年）を併読すれば、綺羅星のごとき英米文学者たちが、立場こそ違え、ただ「文学」のみを信じて切磋琢磨していた半世紀以上前の三田の教室空間を瞥見できる。本誌『コロキア』はまさにこうした学問的伝統を受け継いでいる。

昨今では文科省による人文学抑圧が激しく、大学人は理論武装にばかり時間を取られるきらいもある。そんな時には、かつて福沢諭吉が戊辰戦争のさなかの1868年5月15日にも、ウェーランドによる経済書をひたすら講述し続けた日のことを思い出す。その瞬間の慶應義塾は、おそらく一切の世俗的因果関係とは無縁に、ただ学術的探求心だけに捧げられた象牙の塔だったはずである。『コロキア』もまた、そうした特権的空間としてさらなる発展を続けていくことを祈念してやまない。

（慶應義塾大学文学部教授）